

[翻訳]

イエルク・ヴィクラム『少年の鑑』(1554年) (5)

工藤 康弘・田島 篤史 訳

はじめに

本稿はイエルク・ヴィクラム (Jörg Wickram) の『少年の鑑』 (*Der jungen Knaben Spiegel*, 1554) 本文第十一章、第十二章および第十三章の翻訳である¹。本稿の二人の共訳者は「大阪初期新高ドイツ語研究会」を発足させ、2014年3月より活動を始めている。本稿はその成果の一部であり、すでに本作『少年の鑑』のタイトルページ、献辞、本文第一章から第十章と作品・作者の解説は発表しているため、関心を持たれた読者諸賢はそちらを参照していただければ幸いである²。

翻訳にあたり底本としてハンス＝ゲルト・ロロフ (Hans-Gert Roloff) の編纂によるヴィクラム全集を用いた³。またゲルトルート・ファウト (Gertrud Fauth) およびミヒャエル・ホルツィンガー (Michael Holzinger) による二冊の校訂版も参照した⁴。前者はヴィクラム研究の第一人者に

1 Wickram, Jörg: *Der jungen Knaben Spiegel*, Straßburg: Frölich, 1554.

2 工藤康弘・田島篤史訳「イエルク・ヴィクラム『少年の鑑』(1554年)」、『関西大学西洋史論叢』第17号、関西大学大学院文学研究科史学専攻西洋史専修、2014年、20-32ページ。同「イエルク・ヴィクラム『少年の鑑』(1554年)(2)」、『独逸文学』第59号、2015年、231-241ページ。同「イエルク・ヴィクラム『少年の鑑』(1554年)(3)」、『独逸文学』第60号、2016年、101-114ページ。同「イエルク・ヴィクラム『少年の鑑』(1554年)(4)」、『独逸文学』第61号、2017年、133-143ページ。

3 Wickram, Georg: *Sämtliche Werke, Bd. 3: Knaben Spiegel; Dialog vom ungerathnen Sohn*. In: Roloff, Hans-Gert (Hrsg.), Berlin: W. de Gruyter, 1968, S. 1-121.

4 Wickram, Jörg (Verfasser), Gertrud Fauth (Hrsg.): *Der Jungen Knaben Spiegel; Mit dem Dialog: Eine Warhafftige History von einem ungerathnen Son.*, Straßburg: Karl J.

よる校訂版であり、前書きと後書きにヴィクラムおよびその作品の詳細な解説が付されている。後者は1903年のヨハネス・ボルテ (Johannes Bolte) による一連のヴィクラム作品の校訂版を、ホルツィンガーが作品ごとに廉価なペーパーバック版で復刻したものである。このホルツィンガー版はコンパクトで参照しやすい反面、原典に収められている木版挿絵の一切が省かれているため、作品の臨場感といった点ではやや物足りなさを感じる。以上に加えてバイエルン国立図書館所蔵の初版テキストがオンライン公開されているため、そちらも適宜参照した⁵。

なお原典には章番号もコンマやピリオドや段落の切れ目もない。ファウト版およびホルツィンガー版は独自に章番号を付し、文章を区切り段落分けをしている。本稿ではこれら二版の章番号に従いつつも、文章の区切りと改行は独自に行った。また本稿中に挿入している挿絵はファウト版の該当箇所をそれぞれの典拠としている。

Trübner, 1917; Wickram, Georg (Verfasser), Michael Holzinger (Hrsg.): *Der jungen Knaben Spiegel*, Berlin: CreateSpace Independent Publishing Platform, 2013.

5 <http://daten.digital-e-sammlungen.de/~db/bsb00008420/images/> (2018年1月4日アクセス)。

第十一章

ゴットリーブが自分の主人といろいろ話し合ったこと。とりわけ息子について問われた騎士があらゆることを報告し、フリートベルトの有能さについても話したこと。



さすがの気まぐれで移り気な運命の女神も、しまいにはほんの少し善良な老騎士を哀れみ、次のような具合に相成りました。騎士が実の息子のことを完全にあきらめ、すべてのことに従順で、お互い深い愛情を抱いていたフリートベルトを唯一の慰めとしていたときのことでした。ごらんなさい、ドイツ騎士団長がすべての廷臣を集めて行った祝宴の日に、騎士団長は宮廷長官の老騎士に、古式にのっとり事を進めるよう命じ、騎士は全力で務めを果たしました。さてその時になり、全廷臣がそろった際に、万事滞りなく行われたので、宴席についた人たちはみな驚きました。とりわけドイツ騎士団長はことのほかお気に召しました。

さて宴が盛況のうちに終わり、みんなが宮廷を去ったあと、ドイツ騎士団長は騎士ゴットリーブの手を取り、美しい遊歩庭園へ連れ出しまし

た。二人があずまやにすわったとき、騎士団長は騎士に次のような意見を述べました。「宮廷長官よ、長きにわたって示してくれたお前の忠勤ぶりは、一度も不足を感じたことがない。最初は献酌侍従と内膳正、続いて宮廷長官として仕えてくれたが、お前の忠勤にはいくら感嘆してもしきれない。」騎士が答えて言いました。「やんごとなき崇高なる閣下、私が哀れな騎士として、必ずしも職務が要求するものすべてに貢献してこなかったことは、心から遺憾に存じます。」騎士団長が答えました。「騎士よ、気に病むことはまったくない。これまで必要なことはすべてなされてきた。」

二人は多くを語り合いましたが、中でも騎士団長は騎士の息子のことを知りたがりました。騎士は悲しい気持ちで、息子が家を出て以来、どこでどうしているのかわからないと答えました。「息子のことは心の中から追い出し、もはや息子とは思っていません。私の妻である彼の母親が、彼のために命を亡くしたのですから。代わりの慰めを挙げるとすれば、私の養子はよくできた子で、彼のことは心からとても喜んでいきます。」こうして彼は騎士団長に、二人の若者フリーバルトとフェーリクスの子ぎざまを詳しく語りました。その際、二人が今大学へ行けるほど有能であると話しました。騎士団長はこの二人の若者に関するそのような誉れ高い話を気に入り、彼らをここへ呼ぶようにと、すぐ命じました。それはただちに実現しました。

さて、彼らが騎士団長の前にやってきたとき、彼は二人の様子から、ゴットリーブが二人について述べたことがみな本当だということがわかりました。また騎士団長は自分の財産を二人にたっぷり与え、いち早く大学へ送るべきだとすぐ思い至りました。それは実現しました。二人にはお金と服と馬が与えられ、またそれぞれに常に身の回りの世話をする使用人がつけられました。このような大きな厚意に対して彼らは神さまに感謝しました。数日後には旅の準備がすべて整いました。フリーバルトは主人にいとまを告げると、母親を彼に信頼して託し、母親には神の恵みあれとやさしく伝えました。フェーリクスも同じように行いました。二人は喜々として馬で旅立ち、数日後に大学へ到着しました。そこで彼らは勉強に励み、短期間でたいそう熟達しました。

二人には勉強させておくことにして、アントワープにいる我らの若殿

たちに再び目を向けましょう。彼らは今やほとんど末期的な状態で、お金を使い果たしていました。彼らが袋へ入れてアントワープへ持ってきた小麦や穀類は店の主人の費用になったのです。

第十二章

「善き」少年たちがアントワープで落ちぶれ、身ぐるみはがれて、一文無しでアントワープから引き上げたこと。



一本の道を何度も通ると、その轍はどんどん広がることでしょう。ですから、財布の中に何度も手を入れお金を取り出すと、残ったお金だけでは、財布の中はさらなる空気ができてしまいます。とりわけ多くを取り出して、なにも入れなければなおさらです。この「善き」若者たちの身にもこのことが起こったのでした。お金がいつの間にやらなくなってしまい、店の主人はさらなるお金をもたらしてくれていた郵便局へもはや行くことはありませんでした。そのうえ母親は亡くなり、財布は空きだらけだったのです。主人が自分の客たちについて気づいたことですが、彼らは来店しても、もはや食卓ではとびきりの客ではなく、これ以上に客を引き連れてはきません。要するに、彼らはすっかり意気消沈していたのでした。主人は、この牛たちからはこれ以上乳を搾り取れないだ

ろうと考えました。客たちが主人のもとへ来たとき、彼は若者たちにもはやこれまで通りには座らせず、二人が上座を取ると下座へ行くよう命じました。主人はときおり二人のことを忘れ、食卓に呼ばないこともありました。このことは二人の若者、とりわけヴィルバルトを苦しめました。というのも代金はヴィルバルトが払っていたのですが、彼よりもロタールの方が贅沢をしていたからです。

ある日、主人が高額の記された帳簿と袋を持ってやってきました。この袋はすでに子供を産んで、お腹のふくらみが小さくなっていました。主人は彼らに会計を望み、一度支払いを済ませてほしかったのです。そこで頭を掻きむしることになりました。手短かに言えば、清算を済ませて主人に支払えば、およそ6ブラバント・ポンドが残り、そのお金で二人はアントワープの街から旅立てると考えたのです。

そこで主人が言いました。「お二人さん、あんたがたの仕立屋と靴屋がわたしのもとに来たんですが、一方がこれこれの額を請求してきて、もう一方はこれこれの額を請求してきました。彼らに現金が支払われない限り、あんたがたを行かせないようにとわたしに言ってきました。」ロタールは言いました。「主人よ、俺たちが支払うべきものは取ってくれ。俺たちは仕立屋と靴屋と仲直りするつもりだ。」「私はそれはかまいませんよ。」主人が言いました。「私に損害がなかったらね。しかしあんたがたが請求されている借金を私がそのまま放っておこうとした、なんてことを彼らが考えないために、あんたがたも、わたし自身がそんなことをするなんて考えないために、彼らのもとに使いを遣って、直接あんたがたと話させるつもりです。」すぐさま主人は、馬丁を二人の職人のもとへ遣りました。

偶然にも仕立屋の家には一人の美しい女がいました、その女のところで「善き」仲間たちはかなりの量のうまい酒を飲み、お代を払っていませんでした。女は宿屋へ急いでやってきましたが、事情は知らないように振る舞いました。彼女は、若者たちがこれまでとは違って、もはや自分にそれほど熱をあげないということを見てとりました。ヴィルバルトとロタールはとても悲しい気持ちで座り、両の足で地面をコツコツと叩くと、目を伏せて、失くしたお金を探しました。しかしそれは無駄なことでした。その美しい女は若者たちをののしり始めましたが、まった

く楽しくありませんでした。

そうこうするうちに靴屋と仕立屋の二人がやって来て、彼女に挨拶をすると、自分たちのもとに使いをよこした理由を主人に尋ねました。主人は話しました。「あなたがたお二人は私に言いました。彼らが償って支払わないうちは、出発しようとしても、行かせてはならぬと。」「そうだったな」と二人の職人は言いました。けっきょく二人は計算しました。しかしその額は相当なもので、とりわけ靴屋の方はたいへん高額でした。ロタールは反論しました。「俺たちはほんの短期間のうちに靴でそれほど浪費したというのなら、いよいよもってズボンは一切いくらするんだ？」靴屋は答えます。「その美しい女に渡すために注文した靴も、請求書の中に入ってるよ。」その「善き」若者たちは、これ以上の言い逃れはできませんでした。彼らは払わなければならなかったのですが、すでに所持金がありませんでした。

ようやく善良な娘がワインや酒の周りにやってきました。ロタールは言いました。「善良な女よ、俺たちがあなたがたのところで飲み尽くした分の10倍の額を支払うことになった。会計の段になったら俺たちの分を免じてくれよ。」「とんでもない！」彼女は言いました。「我が家ではしきたりがあるわ。」

わが家へ入りたき者、気前よく払うべし
あんたの金でわたしら贅沢三昧
入る気なければ、外にいろ
あんたらツケを壁に書いた
金がないなら、質ぐさよこせ
女を騙くらかすのは恥だろ
こうしてブラバントでは客をカモにする。』

わたしはこの与太事について何か多くを書くべきでしょうか？すべてのものが支払われなければなりません。ですがこれ以上お金がなかったのも、その善良な女はロタールからきれいで新しいコートを取りあげました。二人とも無一文で宿から出ていかなければなりません。ヴィルバルトも同じコートを持っていました。彼らはそれを1フラ

マン・ポンドで売って、身ぐるみはがされてアントワープから出て行きましたが、身なりはひどいものでした。彼らが得ようと努めたものすべてが手に入ったのでした。しかし私が心配しているのは、アントワープでのしきたりを知らない多くの後輩たちが、同じ学部で博士になるまで、初めはこのような大学で勉強することになるだろうということです。

それはさておき、フリートベルトとフェーリクスがどうなったか、話をさらに進めましょう。彼ら二人が大学でどうなったのか、再びフリートベルトと彼の傅役に目を向けます。フリートベルトが博士に、フェーリクスが修士になるのにわずかな時間しかかかりませんでした。このことはドイツ騎士団長にも知らされたので、彼はたいそう喜びました。ゴットリーブにこの知らせがあった時、彼も劣らず喜びました。そのときたまたま、騎士団長の書記官長が亡くなるという出来事がありました。騎士団長はフリートベルトを書記官長に任命するために、ただちに使いを遣りました。ここでようやくフリートベルトの幸運が芽吹き始めたのです。フリートベルトは自身の副官にフェーリクスを任命しました。わずかな期間で皆から愛され称賛されるほどに、二人とも職務に専念しました。

それは置いておきます。私たちはロタールとヴィルバルトがアントワープを去ったのち、どうなったのかについてさらに聞きましょう。

第十三章

ヴィルバルトとロタールが事を構えて仲たがいし、たもとを分かったこと。ロタールがブリュッセルである肉屋に雇われ、かたやヴィルバルトは見知らぬ土地をさまよったあげく、ある農家に雇われ、家畜の世話をしなければならなくなったこと。ロタールが親方の財産に手をつけ、そのために捕らえられたこと。



「善良な」若者ヴィルバルトは今、来し方を思い、ようやく後悔の念にとらわれ始めました。しかし残念ながら彼には遅すぎました。二人はある晩遅くにアントワープを出立し、その夜はある小さな村にとどまりました。道すがらヴィルバルトは激しく泣きはじめ、嘆いて言いました。「ああ不幸の女神よ、なんとお前は僕をこんな大きな不幸に陥れたことか。ああ僕はみじめな鳥だ。なぜ僕は父上の言うことを聞かなかったのだろう。同じく信頼のおける友であり傳役であるフェーリクスは誠意をもって僕のことを考えてくれたのに、彼の言うことにも従わなかった。フェ

ーリクスや兄フリートベルトの節度ある仲間たちが僕のまわりにはいたのに、二人との友情や仲間たちに僕は満足しなかった。ああ神さま、どこに逃げ場を求めればいいんだ。父上からはこっぴどく怒られた。母上の財産を恥知らずにも浪費した。彼女はこれ以上工面してはくれないだろう。友達とはもう面と向かっては会えない。僕は世間の物笑いになり、横丁の子供らにはののしられるだろう。ああ悪友よ、お前は今僕に何という報酬を与えてくれるのだ。父上や誠実な先生がかつて僕に言ったことはみな、今や現実のものとなる。ああ、僕は見捨てられた哀れな少年だ。いったいどこから抜け出せばいいのだ。僕は働くことにはなじめなかったし、読み書きは忘れてしまった。僕を受け入れてくれる領主はいないだろう。貧しさとみじめさの中で時を過ごさなければならない。僕には生きるより死ぬほうがお似合いだ。ああロタール、ロタールよ、僕ら二人をこんなひどいことに巻き込んで、貧乏と不安と苦難に陥れるなんて。僕らはもはやここから抜け出すことができない。ああ、お前の仲間をかつて好んだ哀れな僕よ。」

墮落した恥知らずの悪童ロタールがヴィルバルトの嘆きに答えました。「ヴィルバルトよ、この件の責任はお前一人にあるのだから、俺に罪をなすりつけるな。ふるさとを奪われた俺も悲しんでいるというのがわからないのか。お前は先生の太ももをナイフで刺し、不安から敢えてそこに留まろうと思わなかったのだから、俺をふるさとから連れ出したのだ。言ってみろ、俺がお前にそんなことをしろと教えたか。決してそんなことはない。俺は流れ出る血にとっても驚いたくらいだから。たとえ俺が刺されても、俺のほうから流血沙汰を起こすようなことはなかっただろう。あのときから俺はお前のために大いに不安になった。というのもお前の父親の怒りは十分に知っていたから。お前が父親に捕まっていたら、永遠の牢獄へぶち込まれ、そこから一生抜け出せなかっただろう。お前は俺に感謝してもしきれないはずなのに、今度はまるで俺だけにその責任があるかのように、あべこべのことを言っている。それがまったく気に食わない。お前の言葉に真剣さがあつたと知ることができたらいいいのだが。お前がどう考えていようが、俺はブリュッセルへ行って、そこでひとりの親方を見つけて、家業である肉屋の仕事を習おうと思う。お前はできることを考えろ。俺はお前に助言も手助けもできないから。お前と

同じく路銀がないので、これからは俺も自分自身でやらないとな。」

ヴィルバルトは仲間に向かってますますひどく訴えました。「ああ、下劣で陰險なロタールよ。本当にお前の名前はむだにつけられたのではないな。価値のないこと（Lotterwerck）は価値のない者にふさわしいから。お前は長年こうしたことにいそしみ、その下劣な行為で恥知らずにも僕から名誉と財産を奪った。おまけに僕の善き友、愛する友を奪った。お前の仲間になったのが災いだった。」

今度はロタールが顔を真っ赤にし始めました。彼はできる限り、そしてひそかにヴィルバルトから離れようとしていました。また実際そうしました。彼は不機嫌さをヴィルバルトにぶつけ、二人はしばらくののしりあいました。ロタールは言います。「お前とけんかしてもおもしろくないし、どうにもならない。しばらくお前の目の前から消えよう。」こう言ってロタールは、二人がいた村の宿から出ていきました。どこへいったのか、ヴィルバルトは長い間わかりませんでした。

ロタールは翌日ブリュッセルへ赴きました。その地で彼は裕福な肉屋に雇ってもらいました。肉屋はかなり年をとっていて、とても多くの下男下女をかかえていました。このならず者の悪童、初めはまったく非の打ちどころのない振る舞いを見せていたので、親方の寵愛を得ました。しまいには親方は、他のどの奉公人よりもロタールを信頼しました。こうしてロタールは親方との親密な関係を築いていきました。

ある日、善良な親方は国を超えて歳の市へ出かけました。以前はいつも連れて歩いていた悪童を家に残しました。親方は彼に留守番をして他の奉公人に仕事をさせるようにと命じました。すべてうまくやりますとロタールは約束しました。ところが親方が家を出るやいなや、ロタールは肉屋のおかみが教会へ行き、他の奉公人がいつものように自分の仕事をする機会を待ちに待ちました。道具をいくつか使い、親方の部屋をこじ開けて入り、有り金全部のあるところへやってきて、大金をすべて袋に詰めたのです。しかし下女のひとりが物音を聞きつけ、あわてて叫び声をあげたので、他の下男下女が走ってきて、驚いた泥棒の悪童を盗みのかどで取り押さえ、捕えて丈夫な縄で縛り上げ、親方が帰るまで拘禁しました。夕方帰ってきた親方は悪童を口汚くどなりつけ、ののしりました。しかし慈悲深い親方は自分のお金に損害がでなかったことを思い、

工藤 康弘・田島 篤史 訳

ロタールを裁判官に引き渡そうとはせず、路銀を渡して追い出しました。